古今和歌集抄

四下

伊地知文庫
文庫20
310
6

伊地知氏書物

吉野川水はいとやくとも瀧のとと共たてゝとそゝ
水のゐはやくとも我はいはれしとしさと
を人うちゝれ一こゝ
為くいはさふとも人樂の袖をりは数多よりあゆめ
文母はいはる夢ハ我とせりて云心よそ人
うたのゆふとゝもゆり組毋よ意の心れ
れとも我とゆふ事れりてや小雅表瓜
為ゝきかふ出ゝ意名と情ゝゆふ紙のむをはれ
かゝ出ゝれ意ハ名のれりれハゆふむをりて
まゝれりゝと為ゝ
ゝゝと

檜の清う悪ひよ
相知り多女
のをとりわ
こをとりそう

おりふしいとりくしかあるべきはずよそへて我衣さ
ぬ
ぬぎてはせくこそ相うためみとうりいて我
衣とさうんと云へく思慈の切なりし　檜のきよ
かなるつる源の神よそかちるみはぬさかへてそうそうそいきめ
源はいと世乃なしいとしもいいなそへそれ我衣と
し秋さんと云こやこまれ
うつ母はをこそわるめ義にさへ人のとうとみうる俗さ
たく長うつこうりふ思ふんのうるこ
源となさおりしれまふかるもしん夢物とさよ人ぐう
うんやいふ約へしし義なし
義物おわしもやとあまあへたうつ母一月みしとはう
ら

ひやうの月一月と義なし　清人　不知
物へ人食つこれなりそれは河と見なりうえそそ
動云河わりとは見ゆまとも見えつうぬ
ぬくしとうちうぬ物むと人目懸と云よ
しうちされは河とうんなりうも源人きよ
しれしとこんうやく人目はくこうまうへしと
そやんはんうつ紀名利とうきうう
とたとへうこそくこは人めはきれはうたん
そうおりへうとうとはいう名利とれまんと
おりへとと人男はそうくさ名利うとそう
おるれはいはうはいとまくさうあとを源と

河ハきハ心家とおりハいたれまてく　ふさう
いと風もとくいろうまくんみとおりつ
こそ

紀友則

流れはせのとやさ心と何うと人めなくこの世さそくらん
心ハ切小おりへくとと人用つまくくこ心毋ま
かゆ　ぬ　ま　こ

寛平御時后の宮の歌合の歌

紀貫之

くれなゐの下ふかくいて恋ハ　ぬ　ま　こ
の根ふくいて水の色ハ泥ふ　ま　ま　ま　ま　ま　ま
てうり寄ハ義ふ　ま　ま　ま　ま　ま　ま
冬ハ池ふ　ま　ま　ま　ま　ま　ま

斯恒

冬の池ふ　ま　ま　ま　ま　ま　ま

北京ヲ九人
アフミノウチ
メノトナンヤス

浪イ
白川のあさきよりそこ底深くながれて世をあはんと云
ふ〜沢ことにいたりて世人は我為ひとり人のす
とあやまりなれと云とあるべき事とにはあらず
ゆるくかくうんとおりへとうんとやはみる人
のあまりなれうしてあること　友則
あらたのこころはれ暮れとあるを乱れ合とあるを
なきこてみるうこと共続よぬきさとるむい続の
たゆまいれ物をはんい為小事は暮れさ物よ
行みれんへなとあるそとあるこ
命惜とあひてい為人のあちれの為に為へ
心いれいへ山ちれとい実わるかるまより

繁そさの河月拙こそ　読人不知
あるさ我名とみるを濤出ちん世をうこへさにはるめすしほ
は物云は奇とは我名もみをとあさ出ちん世
とうるへうふるるするとあるとあるを
中さるる事かうるうるうは海のあるさにはるめすく
なるれ漆濤出るんとあるとあるて行りさたるさ
こ理歌を行り行は名も漆出るといるる和
ゆるり我名をさへはるちくいるちるもゆん
とおりはんと濤出るんとあるるや　平貞文
枕あるるをなを行為と漆せきあへをりしつるる
心いれいるや旧つるるといるるるを我とるり

アル人ノ云柿本人丸カナリ

と根歌にけりや

風吹ハ浪うつ岸の松なれや根にあらはれてなきぬへらなり　読人不知

根となく音と兼たる哥也やうのめく

たきなり心ハあらハしたし

池に住名をゝし鳥の水をあさみかくるとすれとあらはれにけり

無ふも無きことなき菖蒲の字とそ

無き事ハ無きとも名の立ハ吉野の川の瀬つせのこと

無き事の心ハり川さね也

むら鳥の立にし我名今更に事なしふともしるしあらめや

村鳥とハさはきいさはき行心也名のたちてあまりて

なる後はやされハ事なしといふともかひもなきや

あらはしの心也事なしふの小丸字うと

いやうふ云へし下心わやまりてハあらたむる

心あるへきのよしへし

君により我名ハ花に春霞野にも山にも立みちにけり

我名のとは花しくさきれし我人代のひかりもよたと

色に云り世にしわかれてさけといひたんとて春

霞野にも山にも立とよりて我名ハ花によと切て

云ふすこと下へ付るやうにかんかへしとそ

しるといへハ枕たにせてねし物をちりならぬ名の空に立らん　伊勢

塵ならぬ名の空に立とはさしもなく無

かゝりし名のあらはしてやもとかかんとす

そくしん

七十首　清人 弟知

憲章院

陸奥の浅香の沼の花かつみかつ見る人を恋やわたらん

川みなとの事もまれなる人と恋ふる心をわひ見ぬと思ふ事もとかくはとどこそ人へうりる

恋ゆへ

孤上なる中道ゆくふんとふまーやいと見ぬ人をとふ一度もわひぬるやとふひ一心のうやーきまゝとありこかのふ

わひ見ぬ人の心

和とゝ人見ぬ物とまれ草の枕の路をかくもゆる板

恋ータ、ユキ

恋ーとゝ人いふんと付へーさて我恋と

とまるとそるいふみそや結れとひ奇ふさり

てゝたつてゝ伝るかりとそ

伊勢

恋ゝ人見ぬと我面部とそる分れ

我れもけうとゝ人の浅よりひて

見るうれとゝ人とそ我うけふもそけうく

れとゝ人の恋ゝ見ゆとゝ我ゝ見

ゆとゝ見ぬとゝ云ふやいとりてとる心

ヨミ人不知

有明の水の白波立ちかくそ人めわるとゝ水

水ぬしのこのやうにふいく変もあるとおもふ
人がれいとなりくるとかりきんこ
伊勢の蜜の物なるゝ物にてあるめりとあるべし
見てもくわらはしこ

友則

芸能なひく山は物先見れあるに霞ふもあるこふ
山物霞のるゝとやいふて物先組あれを
わひんくなの花わるゝ赤の奇いあい
ゆるの部さてふんとあるこうる事ふかき
心そうりかに物ふひわるゝ物ゝやあるこうん
見てくもあるかにんこ組又撥上一度をかの
かりわひしんわやふふあるきといふ

元何内 貞恒

部屋そのゝ物ゝやゆう撥へ
枝果ん後と生ゝて変ふ
ゝもゝれてゝ云ゝや 清人 素知
なゝひわりゝを理をもゝてゝ云ゝや
能島川渕流ゝる世撥とゝひそてん人い云れ
山ゝ物ゝ人ゝり心のゝりゝひかり
物ゝて海ゝの義のゝや秋とへて条ゝかゝる物ゝ
秋いあ木万ゝ多ゝゝられた秋物ゝとゝいふこと
の義いゝ文ゝもゝけゝわゝ人のんゝもゝゝふ撥
ゝりゝゝや
さ遣ゝよ変ゝて物と秋ゝや秋と行ゝん字治の橋姫

宮の御方 合の方

そしゝゝた
又ゝうちの
動姫

心いれりひろけしつる旧書(かきつら)を引て始つき
まそうりかまも秋とや行らんとそ〳〵秋と
書りしそへ出り歌へ〳〵さ寄りしたそさ
海〳〵は義仏まとそを拾るさそ〳〵宣ふ
をれかりそるとそ
君やちん秋やゆんのいさんい樹の板戸(まき)さす秋〳〵
いさもい母とけやまもいかとを秋〳〵詠
心いとやかゝ庵とれりいやもしいて樹の板戸を
をさそをわるそ一秋の事か沿るへそ
今ちんといひ計に長月のそ明の月と待出るか
蕉(かんせ)とちんと〳〵ひ計に人と月は待て秋と書

月もそるのか秋のこそもん待るん沿(よせい)樹(しゅ)
ちるか寄とそ　漬人　不知
月秋そ寄そと人と寄庵〳〵ふてみたるまそ
月れり沿〳〵なしと云庵〳〵ふてみたるまそ
ひされたそ人まそわりて分れたる
とそ〳〵れりひ絶寄そる義
君とそ人園へもそしこれ待さ秋りとゆひかの秋の蓋
心いかそ〳〵そ〳〵ふ秋ふ更ふるれとふちるひさる
義仏り
宮(みやぎ)殿沿のりとれ〳〵秋(たき)殿とそりと風を待と寄
とそ〳〵まる寄のそ〳〵と秋のんりそ

もせんとて行やうふ君とそなたてと
いふる
あふ坂とも見てう山賤の垣かきのやまとる
垣かといとん香り山うゆといはをろるなり
さて花をへりそへ云り
はの國の名よ云ハ山城のさハあひんんるのこと
名とあ也共云ハ常ちわひんん事と
ちとと云り西國ハまくとと
筑紫の大和ちわ唐衣ろ今て変て
上ハ朝とよ花朝の花ふかろもへて
とけ変見て桜をとやうくもまりき義

ツラ ユキ

義とたり名付ん事かんをとそたよりへ
心ハ桜と花ものとこそいとらうう
やせもーと云りや

読人 不知

三月前の大河の水ハ花ものこれもて桜をめハ
上ハ序ことハなを紀ことをるを歌うこて
なこくあもれもてうわちきれき義ハ
せーなくさむ事もわもー物をんん
かく義ん物ことを秋をとひかき所をこりろ
心ハ人とんをめ一時ちひー事いはとひ
をひゆハ心れる歌ともー為もてう
ふなを事りやなんとれりひーう海さ

りかくるゝとゝ云ふ也や

其屋のことゝ侍りしなる神もとゝ云ふ物ゝ

是は陽成院のおはしましたりしとのゝ事なるべし

ゝ事と者のはゝ〻きゝ侍りしそれなくゝ

やりとゝりて可然ゝ〻ゝ中をゝ

ゝとゝ侍のさゝりは出来なるを歌人

梓弓ひき殿のつら来たれかゝ人よとのゝを

ゝ物ゝ事のいとれかゝ事ゝ出たんゝ

ゝゝれかゝゝゝ来て弁ふとれたけんゝ

よゝゝゝ口右出きゝたりと云ふ人とゝ

ゝ浮海口右といひなゝりゝ

ゝ女房のゝひきの糸とりゝ

是は前の弁ゝ〻ゝ

ゝけゝくれたゝんとゝ

ゝるゝゝや

是人の事は女房の弁くゝ

ゝゝ人の事ゝゝ世ゝ人のゝゝ

ゝゝくゝゝゝ拾ゝ

ゝゝ人ゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

ゝゝゝ

ゝゝゝ

詞ゝ伊勢ゝ

同歌

てんぢんやうふの云出るこんいれりひもせよ
ねりてすもあれねもやこひてこなれ
をしまのうりあまさるとうりあゆへうへんん
んゆまいはをしるあまと云し　ヨミ人不知

大ぬさのうしなわまふかぬれ公へとえてを祈きりくん
大ぬさはんてくこ榊うり麻の苔りを待
をるとをを云は麻はみそ紀なとする時あ
きこのよりあ知うてあの行をとる拍
なまいは神りと海ゐ男のんをたこへく
祈りへをを元祈ますといつるりや　ヨミ人不知
大ぬさはあり社立れ流くこもはのふるせ分りを酒を

大ぬさはたこへてなうを拍なれとる
あわりとうり祈をそのとく仕井ゐ祈り
かくふもあへきのんこ　ヨミ人不知
を海の雲の出かやく煙風とくこをゐ方ふたるひきく
出かあくこうりあ風りたんをてれもこる
かくふかひくあなれい女のこと祈ゐ成とかく
をうこをとこゆうかる奇こ
ふうこを葉わまふかぬれ浪ゐ心の姉きを
りうこわまいは祈ゐりをくはもうれかう
をををうり
大り星ふ祈れをてる雨るたをふりをあるを教る

我しやしそうる男の字とやすてたりくた
り又秋かれよして我行くこりふしめのする
さや頼こそると
そ人の云と此はこそ紀月筆のうて心ハ色ことにし
いてハ發言調に行しそもいかんとく云
いひ出る調しんはわかつへく何事とよさは
人の心わいちしるくうつりける義也
偽(いつはり)のなき世なりせハいか計人のことのはうれしからまし
ほとこそ
偽とおもふものからとかくのたのしとも我ハ頼まん
人のこゝろたのまれ難くもさやうなく

たゝ我ハ頼まんのこゝろ又云人も同偽(いつはり)よそれわ
先とそうるや

素性法師

秋風ふ山の木の葉のうつろへハ人の心もいかゝとそおもふ
世間(せけん)の変化(へんげ)をみて人の心とうつりかわらんと云ハ

友則

蟬(せみ)の聲きけハかなしさ夏衣うすくや人のならんと云ハ
物おもひの時ハ蟬の聲にも物よそうれくたの
まきらハしも又おもひいたる事を作る
かくひとへの調にしき事とて　ヨミ人不知
空(うつ)蟬(せみ)の世の人ことのしけゝれハわすれぬものゝかれぬへらなり
うつせミのよやつゝひ出る事ハしけゝれき人とも
いなん為しけゝれき世の人ハ世の人ハ世のこと

寛平御時后宮の歌合ノ歌

よみ人不知

忘られさりけり時しもあれめとをしかう
別とへしたるへはかなし事なれと忘りてう
せしの義也世のんは人へしの情ましさふ云
也夜抱うしかれらへきや歌義之
何そこそ忘りん中は離まなめそとゝ時の忘れ給ん
心ゆへ下の心ハ十分なりんとおりかす紀義し
忘れなんとおりふんの涙かくふまししまなふかすうた恋しき
わちこさかしるみしたりふもくうしさりと忘れて
とおりなんこたりふなれいとも恋しき心こそ
忘れなん秋と頼むる郎女人の秋ふハおりんともせす
ほとゝきす波ハ秋かしも鳥かれしハそれなますへ

てんのかゝる事はさきに桜花忘れなんと云り
そことも わきを見川のよとみなき心なりや人の心ん
秋られは中の心てしかしいつろふんわりさや
おりんさんはなき抱とよりおりたしむハ
自然のこゝろしわかんの義也

北太中臣ノ
よみ人

淀川のよとむと人のみるらめと流れて深き心ある物を
とゝうれわるハり末のつめなるとさまふそ
かはるまとやなんとこゝろわくうつ紀心
とはり末の為をきしいまてくするゆへ
そこひなき淵やはさはく山川の浅き瀬にこそわく波はたて

世をこひわび紀のひさ人字之底ゆかさきり
関やいさけてこさけたりひ人心のうてさハ玄の業
もなきつゝ世くとゆゝなりやうなしと心
ゆゝハ深さこ玄義とかさわとむりよ多とをん
むしとるハわさきこわ〻ゆゝこ正奇ハ人ゆ
ワゝ心歌もたてゆゝこ時よゆゝるやを
見こゆゝる

紀のこ門紀をあれ多ゆゝ　濱人　不知
初めゆゝを多ゆゝ心秋これゆや
ゆて見れゆゝきゆゝ世ゆゝ先ゆれハ門来
法眼の世ゆゝゆゝ雅友ゆ紀をゆゝ秋ゆゝ

あゝ雅にゆゝみゆゝゆゝ君ゆゝよゆゝ紀をあれ
こゆゝる

ゆゝゆゝ世ゆゝゆゝ秋風のゆひく濱芽の多ゆゝ　濱人　不知
とゆゝゆゝもゆゝ世ゆゝゆゝゆゝ多ゆゝよハ
かゝるをゆゝ世ゆゝ秋こゆゝ世ゆゝ人の雅多
やゝの時よゆゝ奇ゆゝ秋風ゆゝひく濱芽
を多ゆゝにゆゝゆゝ序ゆゝ人とゆゝやゝの秋ゆハ
ゆゝゆゝ

手紙多ゆゝ多ゆゝ秋ゆゝ心一秋の紅葉ゆゝ
多くゆゝ人ゆゝいゆゝ門ゆゝゆゝ秋ハ生ゆゝ
ゆゝ少ハ秋ハいゆゝ紀いゆゝ人とゆゝ分なれハゆゝ雅

我いうりのうとて云事をきゝもとこ　小町
蟲の位置れきゝ人もなかりけんとのこ人の云
うもしへき事もなかさ為と人は行ゆへうう
死もしんと云こゝ

小野雄峯

今日の新こゝ我れ自小社ねとい新す
きのふの日のうけ人こゝ我れ
それやうこ人はきゝれとを我れりしんい人こ立
うひてこれまてとこ云こ

ツラユキ

夜ものこうのうんとはもはなく
夜ものこそうもとれんい色かさわれ
をかくしこ云こ人は行こうきくかるた

と云心宋こあれはもの　読人不知
時き人をんとやきうもせぬ我下ひものとけわるうん
とうんとするやうあもせぬ第のとくはい人こ
色きあやと云時き人とけりこ見こ人のを
きゝめこうあもと部こての義こ
かゝうかそれうけ人の涙日となれは神そめれる
時うかはそれあるとゝうん為こ義のう
日こ月四人こもこ見こ人かれとてうきく我
かまはそれあるとこ云事をこわる
四月涙日とゝやうふ此とへこ神あるこい
心清こせこ人こ年へてあへこ

[illegible]たなし小舟漕ぐ人や恋ひくらん
たなくーと舟ハ動りて小舟こわしおーしと
立かりしかるうーし

伊勢力

ひくこと恋ひ舟ーと恋ひとと更よりくーし池や淀と浮なん
世奇ハ伊勢ゥ仲平小ふれくれ人とひもん
こひる時ーよりよりて心いれひうーそりーー時さ
よかうひろひるとまーて兵とひもんと恋
と新ふくーくれきーひさかーんとーてと
あとと浮なんこーりー水ハ淀ふれさ物るれい
ふそへふりゆうくん動ーて新ふくこ奇こ
いあ人ハ秋ふるゆるかこひきとにこのひとれせて

[illegible]きたひとふりてこひな紀と言れけー
てふるかうれりハ[illegible]ふりーし　大伴黒主
[illegible]ハ出ふ[illegible]さ消ハ初鳥の鳴てひるこ人ふるこ[illegible]や
帰てひるとれりの人れわりと行とくよりる
世奇こと平小わーハこ　典侍義ーヨルカーー
[illegible]ことのたとハ[illegible]てん紀力ふるれいをき恋ーー
云平ふり著の文と逸とくよりとふり紀
力ふるれハこれふるされハこと紀ふれーー文のり
なれとあ力のりをとも云ーやりり
近院ハ所の名也春日為九有
今の松殿の御所也[illegible]あんのあんをるへーこそ

右大臣スマスナリニ
ケレハ彼ノムカシ
ナコロタリケル
フミトモナトリ
アツメテ返スこて
涙テナクリケル

人を思ひあまりて
[illegible]ふるこ
あるに[illegible]春宮の
[illegible]
[illegible]

道隆右大臣

そ不知

とはいとくるしとこの歌はいろひときてこの歌うつ歌見とゝ
心親かくれそうすかなし　ヨルカノ朝臣
むかしの道は常かもとはんとなん人とうつもゝ歌とふりん
かりしかのこかもとをとゝ道をそうせめく
まとゝとゝる心親かうつ枝の云人はうわかるゝ時
かくよゝるこゝとそなの義を為　ヨミ人不知
もこゝうそ歌くもゆるん生おくり弱の見れ歌のたな
世奇ハ羽とうこゝ歌しかもこそ心人とゝい絶て
せめくり弱のわをもうひ折てやすゝへとゝ搬
う源さ無ともいとこうゝ世奇ハ心よりもてそ
かゝ無かうゝ切なる時ハくりなさんとを

中納言源のゆき
の弘法の近に
のみこ侍る時
みはるくおり

そゝん

此うこゝの歌ゝの奇れ集ゝ人事勅撰の　閑院
恵命し
多坂の夕付鳥うりわゝ人そ和の注来とかくもゝめ
云事うりわゝ人　イセ
為つゝ和ゝ和ゝ歌為ゝ人のゝ人れわきてゝんゆゝん
ゝまてゝ見ゆゝこゝ人ゝかゝうりし　宮龍
山賤の近ゝ人ゝこゝまつゝゝ人ゝ人ゝれたゝこゝてゝ
たゝもハわまとゝこゝとゝこゝうゝ人ゝ紀ゝし　サカ井ノヒトサ子
大ゝ人ゝ歌ゝき人の歌ゝ人ゝ物ゝ人ゝとゝ撰ゝ人ゝ
明ゝかゝ人ゝのゝん　ヨミ人不知
ゝ道ゝのゝゝこゝも歌ハ行ゝ人ゝん人ゝてゝも心のゝくゝ歌なゝくゝ

ナヤノマモリケル人ノ娘
ニイトシノヒニアヒニ
モノラフ云ケルアヒタ
ニナヤノヨフト云ケン
ハイソキカルトミラ
モナナシヌキナキナキ
イリノニケルソノノチ
モナカ人ストテヨメル
そしーした

義なし組織(よせ)結ぶこと秘い何せんこと門よ
人ハ逢まてのかてんうせもてこそ逢
ひきとこの義こ

キキカセ

三三人不知

逢色の歌んこてこそ
云ふりの心

歌こそ今ハ来ぬ見なくに思ふ時もあまを
動云わくるれハ言うこきこわくハ海の流ちり
組ちれきこふわくるれと泳へ人おかを
女房をとれいちんとわくこいへたとこへん
もとまこハやメとみてやはるへき流く間裏
寄合小海(うみ)師と組(あと)とこわけうし

ひう事こ代やメ物ちること推となく打
ちりるく撃くけ丸ちるハ激しやメ紀
小付くもありわへこおりしかちはなと

恋哥五

八十二　右兵衛　ナリヒラ

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

此哥伊勢物語のことはらくの事のうんを出らすへきなるへし心は月を花に月は春も花なしもとの春なるへしの哥歌ひとつにもとの身なるよ何事てさもあれはこそ世情派なし此哥は後撰にもこと事のきくうんし

なをへ分の心をたのもしくへし

紀貫之　伊平

紀貫之とは下にあるしるかはしらす人とも出るなり

是は伊平の兄時平　伊勢物語にもいろ〳〵伊平のよりこと物語りもくはしくいはるゝ人とも出るなり

業平こゝの人母は藤原氏　業平かはは藤原

藤原のきさき　藤原門河源氏なり

是事はなくてはなるとは思てそこの

きうはなりしはもとはとはるゝ人とはるゝ

と常とも見なくはせりはんられて年とへさる

恋の心

化何門　朗恒

我とくるとはとはんへしられそやう紀世とんはんん

我とくこは我とはるゝ方とはなりはるこの人もが

こゝろこ人とはるこゝろとこゝろとこゝろとこゝろとこゝろ

こゝろはもうはとはるこゝろこゝろこゝろ

久堅の天津空はるよ人はなはるこゝろ

をハ秋の毒き物なれハ人の秋とこそハ
りたくへのより　　読人不知
見てもまつ人もとまらぬ山の門なれハかなしくとハ人のつ
ゆ世をうしとてこそ
なくなくと人のつ世をうしとてこそ
雲もかく紅葉するあきの秋なれやとこれてのこ世をこ
いとこそれくさとうんて時んと物こ奇ハ的こ物
と歌くんの　　読人しらず
紅葉こそ見ぬ人のあまくあれハ秋なくれ
人あまくなまこハ秋なくハ物こ思ハれんとし
めハ君ら見るめこかくうんのめふそへてとるこ

う紅葉こたにて流るる浦れハかりのこそ蛍ハ
なきめのこ物つるとハなりき事のこそ物られ
そこうこを代秋物のこふ紅葉こうきこ物ハ
かりそめりのこそ人ハ立こうめと根ら
ん人とあるこいハ物すも　　伊勢
わハ物ひて物こハ秋物ハやとの月さへめるこ物
物ひこりわひてのハ物こあひてなこ心こうる
物りりわハ月を物りひこそれるのんる
ハ物こ　　読人不知
秋なくてこそ白露ハ秋ハ紅葉する秋こ物の寒こうり
秋なくてハ秋のうちれ事こ紅葉こそ代

人もこそとし我もとてこそる花の法ゝ
抱んとし法〳〵禅そるる曉〳〵ごとの枕のしつくし
須弥の巻の法やき衣はさとわ〳〵こまま書しわまやゝ
衣をるはさのわ〳〵きへ月書さぬこんいまこう
心のまま書るれいこそこひもこゝろめこんのまと
とはを法そうふかる巻
山城の法れつゝもとかりあさゝ人軽む我をそうみき
つゝもゝみ〳〵こさもこもてうまこと
人のこゝろこゝ法つゝもとゝ人心の
法んこゝろ〳〵かゝと
意はれ水巻門何よぬうそこひ

法門水巻門とゝいそれとてなわゝ
りくとゝりそこゝもなりんゝ心の
法こゝのゆへとゝいふや
曉の明のゝ法りもうさ者ゝ我を救く
抄しゝ法ちれゝ明のゝれうさ法流と計
ゝある人々言のうゝゝと法奇の心曉ゝ
き明のゝゝ言れ百ゝ法ゝゝ新ゝかゝ
なゝ人のゝふ新ゝかゝなく法されて
はゝゝと抄の曉を法ゝ我をゝ
ゝくゝゝゝくゝ法ゝくゝ我を救ゝを
ゝるゝやゝん曉とゝ明園のさゝひゝ丸

明のうつくしさといはんもまたしりがたしと
ていはくしかるに聖人のこゝろ聖人の心こゝろ
又為れかりかたしなれやはしんいかゝ
そうかを賢聖の事わるゝことをそうと云
ひんわるゝ時はこゝろの志ひさしうきこゝ
ろ時へ迷ふこゝろのしつまりあるはひさしく我心の志
つきそこなはりつゝきとこゝ
曉の明の時はこゝろ紀かさわりてもうしなはれ
曉の志ちのこゝろかさるこゝろかさるこゝろ我を洗
ふるゝとゝなるこゝや吹風のごとくにも人のやうくゝ
ふるゝるゝ風みな紀朝こゝ義なりとゝるこゝや

ゝこゝろたゝゆるこゝ
我神ゝまこゝき時あるこゝ落るこゝ心こゝ秋やきはん
人のこゝ秋りひこゝれくゝ時なりこゝ神の時あるこ
山の井の浅さんもこゝと新汁のこゝ人のこゝ
我人こゝるこゝ我人こゝと人いそこゝ和さうふんゆ
さへうけ汁のやうこゝりこゝ振るこゝ
長年の稲こゝ海こゝと年
登事のこゝ紀こゝとこゝ紀こゝ
十月こゝ拍こゝと我人こゝをせるこ
こゝ紀こゝ義紀こゝ紀こゝ紀こゝ義こゝ
義なり

我ふそたに家てかくてかりハ我やハと称ハ人今やとふて
下句れんめつしくや　　　きせん法師
と称ふしも我ふなんてうへをうぢ山中そうるを
後我中ハ去りしにへ見とれハ好ちるけき
のよしし

サタノノボル
秋のゝなみかる花れさされハ人を思の草そおもひける
かりかゝるやのとはあとしり人ととん絶て打
あふく成ふる花の心し雅ふるんれとやるて
かり絶ふるやとくもとう書ハ新の事
あるへし下るハわつハし又云古庵の流まよハ
思草またしてハかれのゝとも書ハ忘れつま

我心もとなかるある庵なりとてもさそれよ
きやうふるもへし

僧正遍昭
我宿ハ道もなきまで荒(あれ)にけりつれなき人を待とせしまに
わかやとハ待ちわひ人ほかるともおほしね
いゝやかんかる紀斉し
とさんくいひて別ちちらしの鳥とのなそ
なりひくしハ目くしともへくいそりとて

ヨミ人不知
別し一日の千代を隔へてつるかと
おめやさハ忘れう目くしの鳴(なく)夕暮ハ年まへれて
思も毎夕(まいせき)ハ新(ぎんこ)に人を待なりし　紫式
かく紀斉し此味もへし

今ハ此俺ハ地と成て我と我もの
世ハ云といとゞ切て俺ハ地とさてうかの
又人と行へきやうに我とたのみをこと云也
志ハのしゝ字ハたゞれいくりるこ
と思ひとゝ知り云れてもこゝ事ハまこゝやまの
面さしかりいられこ分とせちくなりかこ
月ハなを出人まこゝ、ひさくしあとゝちん俺ても新ん
明こ俺ハ肝(かんぎん)ん
抽くいハ秋田るゝ見こゝ初(はつけき)雁の音にそ
ぬこ人の袖(そで)ハ田いゝ人へゝこゝ晴(はれ)ぬこ
たゝこゝ

ゝ人と行分奥の秋風ハふかゝ
いふかゝ
ゝハなりの切なる時のこゝん
人歌と成よる行の之の松ハ分るこゝ地ふたゝ
なりハ人へゝ行へき事とそ　慈覚王
侍の江もつかゝ山ハ行ゝん年ふゝ
ナリヒラノアソン
アヒシリテ侍ケルヲカレカメ
ケルヲカレカメ
二ナリニケレハ又カ
大和守ニ侍ケルモト
ニマカルトテヨミテ
ツカハシケル
二福の山ハ行ゝん年ふゝ
伊勢カ
前尾ぬこ
此哥ハ秋尾ハ二福の山ハ
ひきもせ物ゝて分門と云ハ哥ゝ
和哥ハ人ゝ行へきの哥ハ

さんりわらはるる人おしさはるへいうう
まちはんとうるうやとまふこと心のこ
ふきはらふはやしくわくはりはこを
みもとこのかはかはこさかりはへさ萩の
さとうろふはうきうろはも
かり野風はうはをやはれと家てはやは
みくうすそりうはれこうとうしてと
子細なし但はいこへ而わり　小野の小町
とかくに秋はは萩の葉さへうろはよう
はるりはいはしはのうるとはれてはるこ

雲林院の
ミコ

ありうろはれも花はるとうるはれこ
はるのこんなはは物うさはれはれはるとものこ
をなしこはうりやはなはるこはは葉はこの
の葉こはうはれはとの葉もうはうはうこ
逢坂はは秋下絵　小野　サタメキ
人とこはこははのこははこを風のはたはく葉こ乱こは
前の歌のはうくはうはさこはこはこはれ
はうはく散はは乱こはこ
天雲のはるかにも人は別はうさはうはは見はは
かりはは別こはこははははこはは
月海はりはうはうはうこはうはこはこ
はは海はりはうはうはうこはうはこはこ

ナリヒラノアリ
キノアリツネカ
ムスメトスミケ
ルナウラムル
コアリテミヒ
ノアヒタヒルハキ
テユウサリハ
カリノミミケ
レハヨミラツカミケル

ナリヒラ

云し

家は絶ゆる之物語は又男ありといふ心をよめ
思ひしに此集にてはそれくの心をよく
よれもし云たりしにこの文字を云とくか
とせりけりしとなれて年月へんよかるへし
こそすへし

題不知

かく許なれはかなしそまなれめけてのや嵐となん　カケノリ王
かれかりは木のもともをるまじかりんと云人
のいとく速かなれはかすよのを嵐んといふ
をはさやしと云し

友則

秋風は身にしみけれともふかく人の心は空に成らん
今は我の内りも物し秋風は身にしみて

をふかりけり心にちりて一つなりしをなると
身をしみて人は我見しも理なる
あらしさもなきこといかなる事をあはれと云
さ侍し

源宗于朝臣

流れ行水もたえぬ人の心に風こそ秋ちりしの紅葉をくか
秋よりはさとは秋あはへと云つるんのこえたへむ
の中より秋といふ事あまりてとなおもさ

忠岑

ちりつつ紙くも
きての山林と見てそ時りは流つこえ人もえんに
見しとなりてと見てこそ入りぬる事もれかく
それらのりの中をむ人を身をちらしとては

んちきことかへり
なる比あひ知
く侍りける人
のころく心ち
ねこもりくは
ころへ又も花れ
を深くつつと
しきる

相模守なる人の屋敷に侍りける
かしこまりなる
あひたちの国なる
あやとりてつかはしける

根こゆるんとかかる柳の糸をとりてくんだ
われは三道(さんどう)たりとも三毒(さんどく)を思ふもの
うつゝ人へ流人とはかゝる人へとはんり
さくむをさすらいかなしくて泣りゐるこ
ろ柳(やなぎ)の糸(いと)をとりて小盤(こばん)の浅瀬(あさせ)に流(ながし)ける
かたひのもゆるこゝろ今はこひて浅瀬(あさせ)もしけ
やけそるちの糸といかゝなる柳の糸
のもれと無くやさくんゆるせてこゝ人の心さ
るし時はこてこゝる為なり但やけるる糸の
繁りてもるべきん

伊勢力

地蔵菩薩の
化身なり
北大の
名とぞ

秋の月知

秋の月をさすことを歌にしるしゆゑ
さ侍なれとも

友則

水の泡の消(きえ)くゝ方と云やゝ流て行たのまるか
消くもるれきしをみるうさをはつかなる
行かゝへてりやと新むこしみ云ふこゝ
もるうきを方とこゝ只もるれきう紀貫とこゝ
かゝ下流おきゆゑとるみるふ 憶人不知
水蔵門わりて月水なくいそ流よ秋方とたゝ
山河上い水かさやうかれとゝよわるこゝ
云人しりやゝそこゝ事もわんとゝゆゑ
新じんと

吉野川よしや人こそつらからめはやくいひてし事はわすれし　躬恒

みをしもてみる人こそつらからめともしらす

情の言の葉をはわすれしと云也世上の義を

ひんかへさ事とそ

世中の人の心は花そめのうつろひやすき色にそありける　讀人不知

明也

心こそうたてにくけれそめさらはうつろふ事も惜からましや

我心を悔て歌よし此集にもりうさてとなへ

皆うたかとりあへて云るとみえて世上よ

うたてしきと云り何もかつね詞也

色見えてうつろふ物は世中の人の心の花にそありける　小町

色なき物のうつろふ事はめつらしきと也

かりや此哥義なしも眼の人をも

我のみや世をうくひすとなきわひん人の心の花とちりなは　讀人不知

人の心の花とちりなはといふにてうつろひし人なり

うつろひをもてうくひすとなくや

おもふともかれなん人をいかゝせんあかすちりぬる花とこそみめ　ソセイ

花とおもふ人は待そめしともいかゝすれかくのことく

しかりしされは人の心をもちとちりん

ほうはうつゝふれしこそなくそその恨とこ心

無き物なれはこそとくかと今り

ともかなしかんとはかなしいうはせんや

根とものこうしといふやさしことわる人の
かれんべき事を

読人　不知

とはさく君か枯なは我宿の花をは独見ても忍ん
君か心とそや後をそなた花とも只独の
見みへくこそなれと色おしく人とも忘れはせぬ
なりや忍りんといふ歌なりさしみかなしや
忍なんはなくさまんもあり　宗于朝臣

忘れ草かれもやするとつれもなき人の心に霜ハおかなん
わつハ宗于のあそん一変師流ソセイ

寛平御時御屏風に歌かゝせ給ひける時よみてかきける

忘れ草何をたねとおもひしはつれなき人の心なりけり
つれなき人とはつれなきに折かなく世もなく
してわかれさへせぬ年月をかれは申しく
とは我を忘てんとしかりへされは我心にまよ
これかなし忘れ草の種はつれなき人の心にて有る
義と成給へきと

そしらた

秋の田のいねてふ事もかけなくに何をうしとか人のかるらん
此歌はいねてふ事もかけなくと云んて待ら只
その聴やうなやりよいやと云事もかけなくよ
とこやといふ事もいまねと云給へんは秋
をわかれさへとてもいふわりもやれ
いとねかしと云は斧のさ成さかりや人我不為よ
まる人しかるは刈とうことをそへいふもと

初雁の鳴こそ渡せ世中の人の心の秋しうきれば
世間の人はなんぢらに秋きぬものぞ世中
の人とたやすく世間の人はいとひそむる所にかなり
かくいふも物思ふ人の義こ　　源人不知
袁とをしたれば物思ふ時のつとかすみ
はれぬ物なれば袁とも心ぼそしわきもしらぬ
物なれば時のつとかすみはれぬ物思ふ人の
のいとかなしさそとこ　　源
方をしとふ人の消ぬ物思ふ人はなれ
身をうく消なんとなれはもかるるは
そのなきいかなくんしそとこそ秋ぬるなな

きうかなるこかくても
袁のこゝろふかき信濃の歌こ　　典侍後一直子朝臣
此哥は二条の后きさきの哥こ此集よい直子とへり
此名歌へこ此名歌は方ふるまひのようなる
ねうのこゝろをとりたるなるこゝろ
しを歌こ世をいふこ人と事
をこゝろ死るや此集は二条の后きさきの
をるこゝ此哥は別に名をのせるなり
典侍こゝろ信濃こ此哥は此集の中にも
ふかくする所なりとそ此集は色道を守る
源こ典侍とあるは此名の所名とひき

さけてものゝゝ直子は兆名にて此歌は歌の
太意に兆ととゆゝかりよ詞はなくさ物なれ共
兆聖の姫にと云事毛にかんむりへきあに歌
丁以受所流
いなは
兔見ねもう花も秋かのうく衰へは志てまとそうる
わいかんもを激さめる事の根もと自然のう
き事も只心一より初し歌に趣とらわれん
こすゝやうみ網のうひなくとくあいさしりう
をあらをしてとく傍にも云よし下心一切
世りわりとわりぬりとかにを事は只歌し
のさしはとけ非の方ともかゝまししさうし

寛平御時后の宮の歌合の歌

もくれきあるしなくとは歌むましきの数なり
ひとのさく傍は発連事れあるしなるとよりて
此理とい方に一の句歌をこそうりのる事なと
よめる歌なりしこそ　すゝのしたそむ
流れ一なくさとしは藤しと志へ大心よりてもれつるなそうう
流つまし一なくさは常の紙よわつもとかくりなて
そまるなの事にそれもとなりひきうもと歌むん
とんようてすとは只りつりしは悉之下心一道旅
ましき事ともやと歌むましきの数に
イセ
ぞしした
念れとそこなましのは絶つもなさ名そとなよはえ　ましぬと
明に猶わひりくも侍る切なる字と

ヨミ人不知

それもまたこの事とて歌箱と見さだめいひそめ人のきくふ
見きとれいひそめしかれてはくくも人の
うたひかたりこの事りやと云かくりもてゆく
はの奇しき歌そのの義こ常の歌まかあるを
歌くく人も志〳〵を別あ〳〵人のうりての歌へ
遊事れもて後ある時おそ人れ歌〳〵さ事も知れ
をそこしてぬ時の歌〳〵さい歌こもあるを歌
しりをなくさひもうるうへ〳〵滅よ後もその
歌〳〵さい花ゆう〳〵面へくこう
俺もうる時さ人拍のかなし〳〵さいたこと歌ふ後ゆしん
りひもうるとは人れそこもてそうはの歌を

ヨミ人不知

ひ時ハ中りく歌もかりうへきにかなしきいのつと
れりひ出るかなくそそ心と歌とせひる色
服てもかれてもいそんかそかさ流よ後ろ新かしを
後もてく花ハ歌〳〵對とる拍ハかんのうり
かしていなりれりくこるこ拙力ふ服ろさ面
とそ

ヨミ人不知

ゆくられ今さ深と打拂ひなりうん為とかれり流
りうことりさのもりれきとさへかりひ作くて
歌うんこあと力ハ服りくるよりを云りこ
そ花と紅淺うぬ奇しこ歌力れりへ報こ
りうりこの歌力ふ流ふへり蜜の值てふらくこる

勘云すへく波こもとと云心は末の松山より
我かり侍ましとそたのめしよ末の松山こし
とこそ侍りし世の人は我かりしかなりそてふ
人と云かへり眼る事れなかれきとなりけり義也
陸奥小田とある千紀[illegible]下也ても人の心とかんてそ
人の心はなやらうろひもうかとなりへともな
とくりなしかんなてこれそ云ひもやまあと
いうらしまうれき歳となる也

ありそ海の濱のまさごとたのめしは忘るゝ事の數よそ
勘云まさこよせてかゝりしもなくしかるん
とたのめしはまろき事のたかきよ似るこそ

あしへより雲井をさして行鴈のいや遠さかる我身かなしも
鴈のとふは遠さかりて行くは
目にも見えぬ程なれは我中の眼ろにたとへ
遠さかりもりてかなしめるよし

時雨れつゝもみつるよりも言の葉の心の秋にあふそ侘しき
なかき世の秋よりも人の心のかはりもそ
わひしと云

秋風の吹きと吹ぬる武蔵野はなへて草葉の色かはりけり
是人ひとのもとの心は秋風よりゆかもさへこか
色かはる義也吹きぬると云かはし
彌や世上ゆしとかりゆる

秋風にあふたのみこそかなしけれ我身むなしくなりぬと思へは　小町
逢ことのなきはまさしく秋の田をとりそへてあるへきあら
われ身むなしくなしと気あさうしす
秋風のふきうらかへす葛(くず)の葉のうらみても猶うらめしきかな　平貞文
うらみてもくやしいものなるこゝろはあらはし
秋といへはよそにそ聞しあた人の我をふるせる名にこそ有けれ　読人不知
義なし
わすらるゝ身をうち橋(うぢばし)の中絶て人もかよはぬ年そへにける　読人不知
又ごなたこなたに人もかよはぬ
中絶(ちうぜつ)とはたえたりし人のことを絶て
て年へたるよしなりや
逢事をなからの橋のなからへて恋わたるまに年そへにける　坂上是則
なかくと恋わたるまに年をへて身さへ旧(ふり)
りとなげくよし
うきなからきえぬる泡(あわ)とも流てとだにたのまれぬ身は　友則
うきながら頼まれぬ身は浮(うき)たるあはの
如く消(きえ)残りしとたのみわかろんと　読人不知
なかれては妹背(いも)の山の中におつる吉野の川のよしや世の中
妹背の山の中におつるとは二つの川の間のたぬ
理し隔(へだて)る心をはあらはしたる事は恋部(こひのぶ)又是を
ままおくる事とそ聞ましき事也限る丈夫婦(やうふ)
ほどの事は何事もなかりしへてもりは衰老(すいらう)
になり何事も去れきなかりしひるれなし

や世中とゝまりみな天地と云陰陽と云一切
皆おなじひとつの物こいとんや夫婦いとり
もつまゝきゆきとゝりいたるへ
りゝ父母てゝ事をゝ理をゝよ
ゝ見ては人倫をゝ教ゝ
さゝとりてゝ　時なくやさ月のとゝ
よゝと名て花ゝの色のいろりてたゝゝや
世中ゝ網ゝ色彩ゝ井ゝ弟ゝ一物の理
一部のさゝとり心奇ゝ
知ゝとゝ